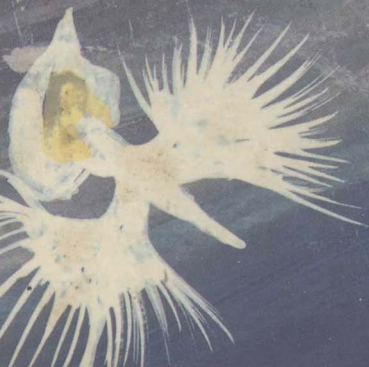


大原富枝

地籟



地籟

大原富枝



© Tomie Ohara 1984

Printed in Japan

地籟

一九八四年五月三十日第一刷

定価 一三〇〇円

著者 大原富枝

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 (〇三) 二六五―二二一

印刷 精興社
製本 中島製本

万一落丁・乱丁がありましたらお取替えします

地籟*目次

地籟	5
歳月	32
よたかの鳴く夜	62
化生の者	91
十七歳	119
混沌 カオス	151
天の暦数	177
地の果て	206

装帧
朝倉
摂

地 籟

地 籟

電話のベルが鳴っている。しかし、待たせておいて、あと二、三字という微妙なところの色紙を書きあげ、急いで受話器を取りあげた。

切るところだった。居ないのかと思った。

栗生簾のいつもの無愛想な声である。

申しわけございません。小さいもの書いていて、終る直前でございましたので……

そりゃ悪いことしたな、そうだったの。

やさしい、機嫌のいい声になったのへすぐおっ被せて、

そんなときは切ったときゃいいんだよ。これからは切ったときなさい。

はい。前、よくそうしておりましたけれど、電話局に叱られましたから。故障するのだそう。

柴崎彌生は正直に答えていた。

かまうものか。仕事は大事にすべきだよ。

はい。そのつもりでおりますけど、いろいろと煩わしいこともございます。

ところでその煩わしい口だよ。蘭をもらってくれないか。もっとも、花はもう来年のことだがね。

蘭をくださいますのですか。

意外で早速には答えられないので、妙に愚かしく訊き返してしまつた。

ああ、みんなもう要らないんだ。いっさいどこかへやってしまふ。好きなものを持ってゆきなさい。

いったい、どうなさいましたのですか。

みんな無くしてしまふんだよ。

あとでお淋しくなりませんか、あんなに丹精なさっていらしたのに……

いやいや、熟慮断行です。

いったい、何かありましたのでしょうか。

なにもない。何にもないからだね。

そうでしょうか。とにかく明日はそちらへ参りますから、必ずおうかがいします。

そう。何日になるかね？

栗生簾はせっかちに訊く。じっさいの年齢も決して若くはなかったけれど、ときどきわざと老年を前面に押し立てて気短さを露わにするのは、あるいは二十歳以上も若い弟子に対するときの照れであるのかも知れない。付き合い合っているときには却ってそれなりの自然な態度が生れるのだが、姿も顔も見えない電話の方が彌生の方もついでぎまぎとしてしまふ。

いえ、火曜日の午後には。少しおそくなりますけど、五時前には必ず。

原宿のマンションにある書道教室へは、月曜日の朝出かけ、火、水と三日間いて、幾組かの生徒を教え、週末の四日間は信州の山小屋で暮すのがもう長い習慣になっている。

よし、わかった。待っている。

信越線に乗っている三時間は読書の時間として恰好であった。この日柴崎彌生は吉野秀雄の『良寛小伝』に没頭して過した。

「良寛が自分自身に課した沈黙の充実」と吉野秀雄が言っている言葉に彌生は心を揺すぶられた。さらに、修行時代の良寛が諸国を流浪していたころ、小庵に小机を置き、その上に唐刻本の『莊子』を載せていた、というところを読むと、ああ、と感動した。良寛と『莊子』ということが決して意外ではなく、むしろ、なるほど、と肯くものがあった。僧でもなく、俗でもなく、ただ純粹に一つの精神として存在することだけを望み、ひたすら純化する工夫を昼も夜もしつづけたという良寛が、『莊子』の「超越」と同じ境地だったのだ、と思う。莊子の超越とは何ものにもとらわれない自由な自分の生き方であった。それは良寛のすばらしい草書、はぶけるものをいっさいはぶき、省略出来るものをすべて略し抜いた造型の極限と言ってもいいあの草書と同じものだ、と思う。

うっとりと考えめぐらせているうちにいつもよりもさらに早く東京に着いてしまった。

マンションの自分の部屋にはいるとすぐベランダの日光室に出てみる。植木鉢が二十鉢足らず置いてあるので、毎週四日間こちらを留守にする間、水やりのための設備をしてある。と言って何も大したことではない。新聞の園芸欄の記事で教えられた方法で、幾つもの深いばけつに水

を入れ、その中に浸した木綿紐の一方の端を鉢の土の中に埋めておくのである。紐を伝って少しづつ水が補給されるわけである。

草花の鉢といっても高貴なものではなかった。やましゃくやく、のぼたん、やまおだまき、しゅんらん、えびね、しろたでとあかたで、かたくりの花、さわぎきょう、みぞはぎ、くまがい草とあつとり草、野の花の好きな彌生が選んだ十種類ばかり、全部で二十鉢にも足りないだろう。書道塾の名にしているむらさき草も一鉢ある。むらさきのひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞみる、という古今集の読みびと知らずの歌に因んでつけたものである。先週、山へ帰る朝ひらいた山芍薬の最後の一輪が、主人の心を汲んだようにまだ花の形を保って待っていてくれた。野牡丹は勢さかんでまだ蕾をたくさんつけている。海老根はすっかり終った。かたくりのあの趣きのある花は今年は咲かずじまいである。気品のあるあの珍しい花が見られなかったのは悲しかった。鉢では無理なのか。信州のわが山小屋の奥の珍しい花がひっそりと人知れず群生しているのを、たっぷりと眺めることが出来た。沢桔梗、薄萩、そして熊谷草と敦盛草もうまく咲いてくれるかどうか。祈る気持でハイボネックスの水溶液を注いでやった。

むらさきも、名の艶やかで高貴なひびきには似ない地味な野草で、群生して咲いているときも雑草にしか見えない。いまは小さい蕾を頭頂に粒々とつけている。この何気ない草から、紫色という個性のかっきりした色素を昔の人は見つけだし、丹念に採り集めて着るものを染めた。それを最初に見つけた人間の素朴なおどろきと心のときめきを、彌生は考えてみないではいられない。そういう心の営みが彼女は好きなのである。西洋渡来の花屋の店頭に溢れている大輪の花々に心が寄ってゆかないのは、そういうときめきが感じられないからである。いつか習字にくる娘の一

人から、カーネーションをたくさん花束にして貰ったことがあった。そのときくらい困ったことはなかった。不器用な女で、まあ、きれいな、どうもありがとう、と口先だけにしろ礼を言ったり、喜んで見せたり、ということが出来ないのである。どきまぎして、正直に困った顔をしてしまった。いくら心の寄ってゆかない花にしろ、美しく生々している花をそのまま棄てるわけにはゆかないので、家のなかのどこかに置いておかなくてはならない、と思うと、正直に困ってしまうのである。

教室にあてている八畳と六畳の二間を掃除して、生徒たちの使う二月堂を並べて空布巾をかけ。これで大体の支度は終りであったが、梅雨あけのやっと明るい陽ざしが眼を射るようで、もったいない心地がする。自分の座蒲団と客用のものを取り出して日向の畳に並べた。今日の生徒は子供たちで初歩の者ばかりである。気持も楽なうえに思いがけないようなおもしろい個性を見せる子供が現れたりして、疲れる割には楽しみもある。とにかく精いっぱい、何の思惑もない筆づかいが見えていて彌生自身刺戟になった。

初歩のクラスで彌生が一番苦手なのは彼女の身体に触れたがる子供たちがいることであった。いまは小学校の教師たちも肉体の触れ合いのなかから教育を考えてゆくのが普通らしくて、小学校で教師にまつわりついている子供たちはここに来て、彌生の身体にさわりたいがる。彌生は子供たちの日向の臭いやさまざまな感触をくっつけている肉体や、大人よりも高い体温の、柔い手や腕にさわられると、何となくそこに紅い痕がつくような心地がする。はっきり言えば彌生は、子供たちが自分という人間とはまったく異質な生きもののように思えるのであった。なにかの折には兇暴になり得る野性を秘めている、純粋なだけに恐ろしい生きもののように思われる。四、五

人もの子供たちにまといつかれると、いつ彼らが理不尽に突然暴力を振いはじめるかもわからない、という恐怖に襲われる。子供たちの甘えと暴力とは本質的に共通のものではないか、と秘かに考えている。しかしそれは、このごろ世間でやかましく言われる子供の暴力沙汰とは何のかかわりもない。子供を持たない彌生のこの観念はずうと昔からのものである。

子供たちは彌生の生活費の一部を支えている大切なお客様であったから、その気持を出さないように彼女はいつも注意している。だから誰も彼女のそんな幾分病的な恐怖を知らない。もし気がつくか、あるいは見抜くことが出来たとしたら、それは栗生老人であったかも知れない。しかし、栗生簾は彌生が子供たちに接しているところを一度も見ることがないのであった。

栗生家の裏木戸は彌生には一度だつてうまく完全に開けられたことがない。彼女が非力だということもあるにはある。いったいどこがつかえているのだろうか、とよくよく上下、左右眺め廻してどこも支障のないのを確かめてから全身の力を入れてみると、やっと少し開くことが出来た。どこがどうというわけではなく、全体が狂っているのである。身体を横にしてやっとすべりこみ、庭を見廻すと、開いているのを一度も見ただけのことのない表門の上に被さる松の大木も、裏木戸から庭へ廻る横手の萩の袖垣も、伸びに伸びて乱れきっている。いつ手入したものかわからない。それでもどこかに人の住んでいる家の温かみを感じられ、人の手の僅かに加わっている秩序があって、それがある快い類れの諧調になっている。栗生老人の生きる深度というか、ほどほどに生きている度合が庭にも植物たちの姿にも出ているといつてよかった。ほとんどうちやりっ

放したが、しかしまったく打棄てられているわけでもない。

おう、来たな。

二階のペランダから老人の声が降って来た。

そのままあがって来なさい。

ペランダに通じている鉄製の階段をのぼってゆくと、栗生老人はいきなり言った。

どれにする？

何でございますか？

蘭さ、持って行くんだろ？

そう言いながら初めて顔をあげて彌生の全体を見あげ見おろして、ほう、と改めて眺めた。
なるほどな、と肯いている。

え？

いや、ちょっとした女っ振りだな、と思つてさ。いつでもそんなちゃんとした恰好で教室へは行くのかい？

紺無地の縞に白献上の帯に翡翠の帯止め、とわざとじろじろと無遠慮に見ている。

いえ、うちでは服のままですよ。出かけるときだけ。今日は会社のクラブを二つ持ちましたし、あとでこちらへ廻るつもりでしたから……

幾つになつたっけな？ あんた。

栗生老人の話はあっちへとびこちらへとび、勝手気儘でしかも相手に否やをいわせないせっかちなところがある。

齡ですか。五十五になりました。

ふーむ、齢きくと婆さんになったな、と思うけど、本人見ると若いんだなあ、案外……

いまはみんな若いですよ。普通です。

彌生は無愛想に答えて、花が終って休養期にはいつているものが多い蘭の鉢の棚を眺めた。デンドロビウムやシンビディウム、カタセトウム、ブラッシア、カトレア、くらいしか彌生にはわからない。

どうして蘭をかたづけておしまいになるのですか。

これだけの見事な株に愛育するには十数年はかかっているにちがいない。彌生が漢籍を教わり

に出入りしはじめた数年前には、すべてもう揃っていたと思う。
厭になってしまったんだ。行方不明になりたいとき、いつもこいつに足を引っぱられるんだから。

彌生は栗生簾の顔をまともに眺めた。

行方不明になりたい、とおっしゃるのですか。

栗生簾はちょっと含羞の笑みを浮べた。それを打消するように例のせっかちに言う。

いま、いちばん切実なのは、行方不明になりたい、ということだ。

彌生は眼を逸らして蘭の鉢を眺めた。

それはむつかしゅうございますね、革命と同じほどむつかしゅうございますわ。

行方不明になりたい、それがいま、いちばん切実なことなのだ、と栗生簾は言う。彌生はかつて自分もそれを、いや、それだけを考えて時期があったのを思っている。

なに、あんたのような若い者にはむつかしいが、私のような年寄りにはさほど困難ではないよ。そうでしょうか——

彌生は蘭の鉢のごみを除^とてやった。

そうだよ。蘭さえ片づいたら、あとは大したことない。さあ、どれにする？ カトレアか？

いいえ、蘭はもういただきません。信州と東京をとび歩いているわたしには、とても無理ですから……

そうかな、大した手かずかけることはないんだよ。

それに、かたづけておしまいになると、先生は行方不明になられるんでしょ？

彌生はわざと真面目な顔をして言った。

二人は老人の居間に移り、彌生は部屋の隅にしつらえてある水屋で茶の支度をはじめた。水屋はいつもこぎれいにかたづいている。彌生は栗生家のことはよく知らない。夫人は二十年ほど前に亡くなり、通いの家政婦が朝と夕方隔日に来る。息子が九州の大学に勤めていることだけ知っている。その息子の家族とも逢ったことはなく、孫がいるのかどうかも知らない。栗生簾はまったく過去のことや血縁のことを話すのが嫌いなのである。

彌生の別れた夫の裕三が同じように親戚づきあいをしなない主義だったので、同姓だとは思ったが、栗生簾が一族のそれも大して遠くない裕三の血縁の人だとは教えてくれた友達が現れるまで知らないでいた。知ってみるとなるほどと思わせるような相似性が性格にあった。裕三が血縁のことを語らなかつたように、栗生簾は過去を語らない。

そうかな、革命ほどむつかしいかな？ 行方不明になることは——

栗生簾はいままでこの種の言葉、つまり生きることについての倦怠感、あるいは生き兼ねる思
いへの厭悪について、音をあげたことがない。

わたしにとってはそうでした。先生の場合はまた別かも知れません。わたくしとちがって先生
は強い方ですから……

ははは。「小さき知は大いなる知に及ばず、みじか小き年よわいは大いなる年に及ばず」かな。

こういう文章が出てくると、栗生簾は老人ではなくなるのだった。

あるいは中国の文化そのものに、神仙道に通じる老を尊び老に憧憬する思想があつて、老年の
持つ不可思議な生命力とその永遠性が、自ずと人間にも働きかけるせいかも知れない。

そうか、蘭はそれでは持つて行かないか？

はい。洋種の派手な蘭にはちつとも心を惹かれなくなつてしまつたのです。花は茶花がやはり
最高だと思ひます。野生のものなら、蘭でも面倒みる気になりますけど……

だめか。当てにしてたんだがな。野生のものなら何も栽培することないよ。野生のものを栽培
する、そのことが私は嫌いだよ。

彌生はあつと思つて栗生簾を見た。こういうところが裕三とそっくりだ、と思う。西洋建築美
学をやつた彼が、好みにおいてはこの漢籍老師と相似ているところがおもしろかつた。

すみません。わたくし、栽培しておりますの。

彌生は皮肉たつぷりに笑つた。

野生の花はいま滅びつつあります。花屋にも山野にもありません。栽培しなかつたら見るこ
とが出来ませんもの。